

愛着スタイルと乳幼児との接触時感情が養護性に与える影響 — 情緒応答性の関連の検討 —

小田 穂香¹・清水 寿代²

Effects of Attachment and Feelings of Contact with Infants on Nurturance — relationship between nurturance and emotional availability —

Honoka ODA, Hisayo SHIMIZU

Abstract: Recently, there has been an increase in the number of child abuse cases in Japan. However, the causes of child abuse are still not well-understood. We need to find ways to prevent improper parenting. To this end, we conducted a survey on attachment, feelings of contact with infants, and thoughts and behaviors about nurturance among undergraduate and graduate students. The investigation revealed that when attachment anxiety is low, vivid memories of pleasant feelings during contact with children act as a modifier that significantly enhances nurturance. However, in case of high attachment anxiety, pleasant feelings are not effective as a modifier. As for attachment avoidance, the effect of pleasant emotions was not significant. However, in case of low attachment avoidance, high discomfort significantly increased the acceptance of active nursing roles. Therefore, when the attachment style is avoidant, it is important not to arouse unpleasant emotions and forget memories of unpleasant feelings during contact with infants in order to enhance nurturance. Furthermore, we investigated how emotional reading, one of the elements of emotional availability, changes depending on the level of nurturance. It was found that students with low nursing ability are more likely to feel that children are thinking and concentrating on their own or describe actions and states from the vague expression of infants than those with high nursing ability. Those with higher ability to provide nurturance tend to read the ambiguous expressions of infants communicating that they require emotional interaction with the caregiver than those with lower nurturance. In addition, it was shown that adolescent women are more likely to focus on the physical condition of children than adolescent men.

Key Words : Nurturance, Attachment, Feelings of contact with infants, Emotional availability

目 的

近年、核家族化などの社会環境の変化により、青少年が「育児の学習」をしにくい状況となっており、このことが児童虐待など、子どもや家庭における問題につながっていると言われてい

る(川瀬, 2010)。厚生労働省(2019)によると、平成30年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数は159,850件あり、これまでで最多の件数となっている。児童虐待へのアプローチにおいて、児童虐待の「早期発見から早期介入」と同等かそれ以上に「子どもの虐待防止」という視点が重要になると指摘されている(中根, 2007)。親になってから自身の子どもに対して不適切な養育をしてしまうことを防ぐために

1 広島大学大学院教育学研究科心理学専攻博士課程

2 広島大学教育学研究科附属幼年教育研究施設

は、親になる前段階である青年期の養育的資質へのアプローチが重要であると言える。したがって、青年期の養育的資質に関する調査が必要である。

親になる以前から形成される養育的資質として養護性が挙げられる。養護性とは、Fogel, Melson, & Mistry (1986)により理論化されたnurturanceに由来し、小嶋(1989)が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義したものである。

小嶋(1989)によると、養護性は成人期になって顕在化するものではなく、幼少期から育成されていくものであるとしている。先行研究では、親になる前に養護性をどれだけ身につけているかが、実際に親になった時の子どもへの敏感さ、子どもに対する応答などに大きく関与することが示されている(無藤・久保・遠藤, 1995)。

また、Fogel, Melson, & Mistry (1986)や小嶋(1989)は高齢者や動植物など、子どもに限定せず多様な対象を育てる資質を表す広義の概念として養護性を提唱したが、子育てに関する研究においては子どもに対する共感性や応答性といった狭義の概念として扱われており(蘆田, 2010)、多様な対象を育てる行為が後の「親の子に対する心理」と結びついていくと考えられている(榎澤・福本・岩立, 2009)。本研究では育児行動に繋がる資質を検討するため、子どもを対象とした養護性に注目する。これまで養護性や親性準備性といった子どもへの態度を対象とした研究では、愛着スタイルとの関連が多く検討されてきた。

Bowlby (1973)は、母と子の情緒的絆を愛着(attachment)と呼び、アタッチメントは成長とともに行動レベルから表象レベルへと変化し、個人の内的表象として形成されるとした。内的作業モデル(Internal Working Models; IWM)は、乳幼児期における愛着対象との相互作用によって個人に内在化される、自己および愛着対象に関する心的表象のことである。IWMが新しい状況や関係の中でも象徴的に機能することで、一般性を持った対人関係のモデルとなると言われている(Bowlby, 1969)。

先行研究では、回避的なIWMを持つ大学生は子どもへの同情、好奇心、寛容性を低めることが示されている(扇原・上村, 2018)。また、松本・重橋(2017)では、IWMが安定的でない青年期女性は、親になることへの期待や認識、

価値観が低いことが示唆されている。岩治(2009)でも、安定的なIWMは養護性の高さと正の相関がある一方で、回避的なIWMは養護性と負の相関にあることが示されている。これらの先行研究の結果より、愛着スタイルが不安定であっても、子どもへの関心や親になることに対する意識を高めるためにはどうすれば良いか検討する必要があるだろう。

愛着スタイルの他、養護性と子どもとの接触経験の関連についても研究が多く行われている。礪波(2011)では、子どもとの接触経験の量が養護性に影響を与えているとした。これまで養護性や親準備性といった子どもへの態度に関する多くの研究において、接触経験を多く持った者ほど、肯定的な子どもへの態度を持つようになることが示されてきた(礪波, 2011; 安積, 2007; 小嶋, 1989)。

しかし、扇原(2017)では、接触経験よりも接触時感情の方が子どもへの関心に及ぼす影響は大きいことが示された。このことから、接触経験と子どもへの態度の関連は疑似相関であり、感情が第3の変数として機能している可能性があることが扇原(2017)は指摘している。つまり、過去に乳幼児と接触した頻度や量よりも、どのような感情を抱いたと記憶しているかという質的な側面の方が、後の子どもへの態度に及ぼす影響が大きいことを示唆している(扇原, 2017)。先行研究では、子どもとの接触時の快感情が子どもへの関心を高め、不快感情が寛容性を低めることが示されている(扇原, 2017)。

以上より、不安定な愛着スタイルは養護性の低さに繋がる一方で、子どもとの接触時に抱いた快感情は養護性を高めることが先行研究では明らかにされている。小嶋(1989)より養護性は生涯を通して発達していくものであることから、幼少期に身に付けた愛着が不安定であっても、後に子どもとの接触を行い、その時に抱いた感情によって養護性を高めることは可能であると考えられる。

したがって本研究の目的の1つは、愛着スタイルと養護性の関連において、乳幼児との接触時感情が調整要因としてどのように働くかを検討することとした。仮説として、見捨てられ不安または親密性の回避が高いと養護性は低くなるが、その際に乳幼児との接触時に快感情を抱いた経験が調整要因として働くことで、養護性が高まると考える。

さて、養育行動における重要な一側面として

情緒応答性 (emotional availability) が挙げられる。情緒応答性とは、養育関係における、「乳児の情緒表現への気づきと共感的な反応および母親の情緒表現の提供」という一連の応答能力のことである (Emde & Sorce, 1983)。Emde & Sorce (1983) は、乳児と養育者には生物学的に基礎づけられた報酬システムがあり、この報酬システムを情緒応答性システムとした。乳児は情緒信号を送ることを通して養育者に自分が何が欲しいのか、また満足しているのかといった現在の状態を伝える。そして乳児の要求や感情などの表情や信号を、大人が読み取り応答することが重要であるとしている。このことから、子どもに気づいて共感的な反応を返すという情緒応答性は、子どもに対する敏感さや応答に関与する養護性と深く関わっているのではないかと考える。

Biringen & Robinson (1991) は情緒応答性の構成要素として、①母親の「感受性」：子どもが発するサインに対する的確な解釈と適応的な反応、②母親の「非侵入性」：母親が子どもの行動に対して示す肯定的・非干渉的態度、③子どもの「反応性」：母親の働きかけに対する子どもの反応、④子どもによる「関与の促し」：母親を相互作用に引き込むための子どもの行動の4つを挙げている。情緒応答性の研究として、IFEEL Pictures (Infant Facial Expression of Emotions from Looking at Pictures; Emde, Osofsky & Btterfield, 1993) を用いた研究がある。IFEEL Pictures は30枚の乳幼児の表情写真を見て、乳幼児の感情をどのように読み取るかを把握するツールである。これをもとに、井上・濱田・深津・滝口・小此木 (1990) は、生後12カ月の日本人の乳幼児の写真30枚を使用し日本版 IFEEL Pictures を開発した。長屋 (2009) では、日本版 IFEEL Pictures を用いて女子大学生と母親の比較を行い、母親の方が親子の相互作用や子どもの身体的な状態に対して敏感であるとしている。また、乳幼児との関わりを持つ母親は大学生に比べて自己主張や欲求といった乳幼児の要求や意図に関する回答が多いという結果が先行研究で示された (平野他, 1997)。

情緒応答性に関して様々な研究がなされてきたが、情緒応答性の発達的变化についてはまだ十分に検討されていない。Emde (2000) は、情緒応答性の今後の研究課題として、情緒応答性の発達のプロセスを明らかにする必要性を述べている。

したがって本研究の目的の2つ目は、養護性と、情緒応答性の要素のひとつである、子どもの感情・情緒の読み取りとの関連を調べることとした。養護性の高低によって子どもの表情から読み取る感情・情緒はどのように変化するのかを探索的に検討する。

方法

調査対象 広島県の大学及び大学院に通う学生46名に実施した。スノーボールサンプリングにて調査協力者を募集した。なお、協力者に対しては研究目的とプライバシーに関する配慮について説明を行い、個別に参加の同意を得た。

調査時期 2019年8月から11月にかけて実施した。
実施方法 実験室にて、調査協力者1名に対し調査者1名が日本版 IFEEL Pictures (井上・濱田・深津・滝口・小此木, 1990) を実施した。その後、質問紙を用いて、乳幼児との接触時感情尺度、養護性尺度、一般他者を想定した愛着スタイル尺度、フェイス項目の回答を求めた

(1) 感情・情緒の読み取りの測定

日本版 IFEEL Pictures (以下 JIFP) を用いた。JIFP を示し、「ここに赤ちゃんの表情を撮った写真が30枚あります。それぞれの写真の赤ちゃんがあらわしている、一番強くてはっきりしている感情・情緒はどんなものでしょうか。あなたの心に最初に浮かんだ言葉を、そのままできるだけ1つの単語で、お答えください。なお、回答には正しいとか間違っているというものはないので、気楽にやってみてください。」と教示し、回答を求めた。逐語的に記入用紙に記録し、得られた回答については関係性評価カテゴリー (長屋・濱田・井上・深津, 2008) に従い、2名の評定者が独立に評定した。その後、参加者から得られた全ての回答における評価の一致率を求めた (一致率 $\kappa = .956$)。評定者間の不一致があった場合は合議によって決定した。

(2) 乳幼児との接触時感情の測定

「子どもとの接触経験についてうかがいます。子どもとの関わりが最も多かった時期を思い出してください。」という教示文に対し、主に関わった子どもの年齢 (1歳未満・1～2歳・3～4歳・5歳以上・子どもと関わった経験はほとんどない) に複数回答で回答を求めた。

そして、乳幼児との接触時感情尺度 (扇原・首藤, 2016) から15項目を用い、質問紙上で回答を求めた。「あなたが子どもと関わった時に抱いた感情や気持ちに最も近いと思う数字をひ

とつだけ選んで○をつけてください」という教示文に対し、「まったく感じなかった」～「とても感じた」の4件法で回答を求めた。

(3) 養護性の測定

養護性尺度(中西・粟津, 1996)から21項目を用い、質問紙上で回答を求めた。

「子どもに関するあなたの考えや行動についてうかがいます。あなたの考えや行動に最も近いと思う数字をひとつだけ選んで○をつけてください。」という教示文に対し、「全くあてはまらない」～「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

(4) 愛着スタイルの測定

一般他者を想定した愛着スタイル尺度(the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version; ECR-GO; 中尾・加藤, 2004)から10項目を用い、質問紙上で回答を求めた。

「対人関係の中でどのような気持ちを持つかについてうかがいます。あなたがいろいろな対人関係の中でよく体験している気持ちや感じ方に最も近いと思う数字をひとつだけ選んで○をつけてください。」という教示文に対し、「全くあてはまらない」～「非常によくあてはまる」の7件法で回答を求めた。

質問紙では上記に加えてフェイス項目として、所属学部・学科、学年、性別、年齢について回答を求めた。

結 果

以下の分析には清水(2016)のHAD (Version. 16_101)を用いた。

調査対象者は男子学生22名(47.8%)、女子学生24名(52.1%)であった。年齢は平均22.9歳(SD 1.92)であった。専攻は心理学専攻27名(58.7%)、教科教育学・特別支援教育学専攻が13名(28.3%)、その他工学部など6名(13%)であった。

乳幼児との接触時感情について、扇原・首藤(2016)を参考に3因子を仮定して最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。扇原・首藤(2016)と同様に、第1因子を「快感情」、第2因子を「不快感情」、第3因子を「当惑感情」とした。Cronbachの α 係数は第1因子が $\alpha=.78$ 、第2因子が $\alpha=.68$ 、第3因子が $\alpha=.72$ であった。それぞれの下位尺度の合計得点を算出し、各因子の得点とした。

養護性尺度について、中西・粟津(1996)を

参考に3因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。小嶋(1991)、中西・粟津(1996)を参考に、第1因子を「赤ちゃん・子どもへの興味(以下“興味”)」、第2因子を「子どもをうまく扱える自信(以下“自信”)」、第3因子を「積極的な養護的役割の受容(以下“役割”)」とした。Cronbachの α 係数は第1因子が $\alpha=.88$ 、第2因子が $\alpha=.87$ 、第3因子が $\alpha=.84$ であった。3つの下位尺度の得点を全て合計したものを養護性尺度得点とし、それぞれの下位尺度の合計得点を各因子の得点とした。

ECR-GOについて、中尾・加藤(2004)を参考に2因子を仮定して最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。中尾・加藤(2004)と同様に、第1因子を「親密性の回避」、第2因子を「見捨てられ不安」とした。Cronbachの α 係数は第1因子が $\alpha=.87$ 、第2因子が $\alpha=.86$ であった。それぞれの下位尺度の合計得点を算出し、各因子の得点とした。

接触した乳幼児の年齢、乳幼児との接触時感情、養護性、ECR-GOの各下位尺度間の関連を検討するために、それぞれの尺度得点について、相関分析を行った。

まず、“乳幼児との接触経験がほとんどない”という回答については、養護性尺度の“興味”($r=-.44, p<.01$)、“自信”($r=-.55, p<.01$)において強い負の相関が見られた。乳幼児との接触時感情尺度の快感情については、養護性尺度の“興味”($r=.50, p<.01$)、“自信”($r=.43, p<.01$)において強い正の相関が見られ、“役割”($r=.32, p<.05$)において正の相関が見られた。

養護性尺度の“興味”については、女性($r=.41, p<.01$)において強い正の相関が見られ、ECR-GOの親密性の回避($r=-.26, p<.10$)において弱い負の相関が見られた。養護性尺度の“役割”については、ECR-GOの親密性の回避($r=-.36, p<.05$)において負の相関が見られ、見捨てられ不安($r=-.27, p<.10$)において弱い負の相関が見られた。

愛着スタイル、乳幼児との接触時感情、養護性の関連を検討するため、仮説をもとに階層的重回帰分析を行った。

まず、養護性を従属変数とした時の、快感情と見捨てられ不安の交互作用を検討した。その結果、交互作用が有意に見られた($R^2=.31, \Delta R^2=.00, F(2, 45)=7.89, p<.05$)。快感情と見捨てられ不安の得点に各平均値 $\pm 1SD$ の値を代入

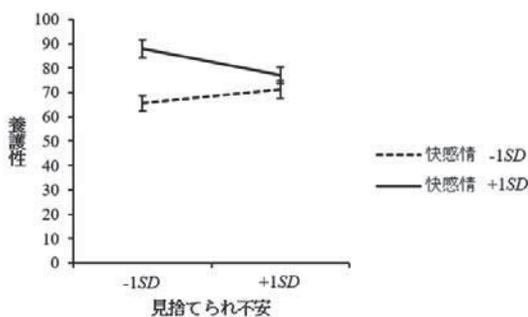


Figure 1. 快感情, 見捨てられ不安を独立変数, 養護性を従属変数とした階層的重回帰分析 (エラーバーは標準誤差)。

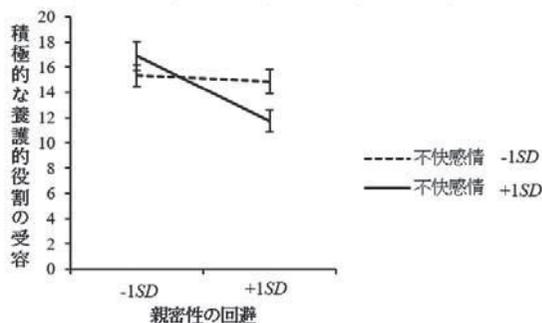


Figure 2. 不快感情, 親密性の回避を独立変数, 積極的な養護的役割の受容を従属変数とした階層的重回帰分析 (エラーバーは標準誤差)。

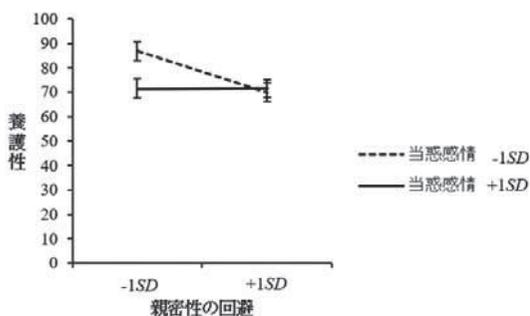


Figure 3. 当惑感情, 親密性の回避を独立変数, 養護性を従属変数とした階層的重回帰分析 (エラーバーは標準誤差)。

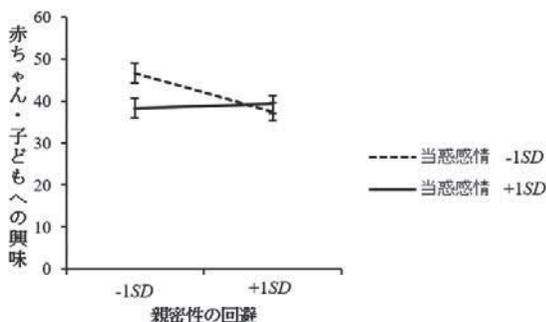


Figure 4. 当惑感情, 親密性の回避を独立変数, 赤ちゃん・子どもへの興味を従属変数とした階層的重回帰分析 (エラーバーは標準誤差)。

し, 単純傾斜の検定を行ったところ, 快感情が高い場合において見捨てられ不安が低いと養護性を高めることが示唆された (Figure 1)。

また, 親密性の回避と快感情を独立変数, 養護性を従属変数とした。このとき, 有意な結果は見られなかった ($R^2=.36, \Delta R^2=.08, F(2, 45) = 4.64, n.s.$)。

次に, 養護性を従属変数とした時の親密性の回避と不快感情の交互作用を検討した。その結果, 交互作用は有意ではなかった ($R^2=.12, \Delta R^2=.02, F(2, 45) = 1.83, n.s.$)。養護性の下位因子ごとに階層的重回帰分析を行った結果, “興味” ($R^2=.07, \Delta R^2=.01, F(2, 45) = 1.12, n.s.$) と “自信” ($R^2=.05, \Delta R^2=.01, F(2, 45) = 0.71, n.s.$) においては交互作用が見られなかった。

“役割” を従属変数とした時, 親密性の回避と不快感情の交互作用が有意であること ($R^2=.25, \Delta R^2=.09, F(2, 45) = 5.30, p<.05$) が示された。不快感情と親密性の回避の得点に各平均値 $\pm 1SD$ の値を代入し, 単純傾斜の検定を

行ったところ, 不快感情が高い場合において親密性の回避が高いと “役割” が低いことが示唆された (Figure 2)。

また, 養護性を従属変数とした時, 当惑感情と親密性の回避の交互作用を検討した。その結果, 交互作用が有意に見られた ($R^2=.22, \Delta R^2=.09, F(2, 45) = 3.93, p<.05$)。当惑感情と親密性の回避の得点に各平均値 $\pm 1SD$ の値を代入し, 単純傾斜の検定を行った結果, 当惑感情が低い場合, 親密性の回避が低いと養護性が高いことが示された (Figure 3)。

養護性の下位因子ごとに階層的重回帰分析を行った。

その結果 “自信” ($R^2=.12, \Delta R^2=.04, F(2, 45) = 2.00, n.s.$), “役割” ($R^2=.18, \Delta R^2=.03, F(2, 45) = 3.07, n.s.$) を従属変数とした時に当惑感情と親密性の回避の交互作用は見られなかったが, “興味” を従属変数とした時 ($R^2=.18, \Delta R^2=.09, F(2, 45) = 3.11, p<.05$), 交互作用が有意に見られた。当惑感情と親密性の回避の得点に各平均

Table 1 個人内における JIFP6 カテゴリーの平均反応数

カテゴリー	平均	SD
逸脱	0.87	1.22
対象希求	0.87	0.80
欲求	3.02	1.98
基本的情緒	14.24	4.55
生理	3.20	1.72
思考・集中	6.13	3.10
状態	1.93	2.12

値±1SDの値を代入し、単純傾斜の検定を行ったところ、当惑感情が少ない場合において親密性の回避が低いと「興味」が高いことが示唆された (Figure 4)。

次に、JIFP 各カテゴリー反応数の平均値と標準偏差を算出した (Table 1)。その結果、基本的情緒が最も多く、長屋・濱田・井上・深津 (2008) の女子大学生の結果と類似した分布となった。なお、「反応拒否」は出現しなかったため以降省略する。

養護性と子どもの表情写真を見た時の感情・情緒の読み取り方がどのように関連するか検討するため、対応のない *t* 検定を用いて JIFP の各カテゴリー反応数を養護性の高低群で比較した (Table 2)。

“思考・集中”の反応数が、養護性高群よりも養護性低群の方が有意に多いこと (*t* (46)

Table 2 養護性得点別における JIFP6 カテゴリーの平均反応

カテゴリー	養護性	平均	SD	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	効果量 <i>d</i>
逸脱	高群	0.75	1.15	0.69	.49	0.20
	低群	1.00	1.31			
対象希求	高群	0.75	0.79	-1.26	.22	-0.36
	低群	0.45	0.80			
欲求	高群	3.46	2.02	-1.59	.12	-0.46
	低群	2.55	1.87			
基本的情緒	高群	14.79	4.73	-0.86	.40	-0.25
	低群	13.64	4.37			
生理	高群	3.25	1.73	-0.22	.83	-0.06
	低群	3.14	1.75			
思考・集中	高群	5.25	2.59	2.09	.04	0.61
	低群	7.09	3.37			
状態	高群	1.75	2.29	0.61	.54	0.18
	低群	2.14	1.96			

Table 3 養護性得点別における JIFP3 側面の平均反応数

カテゴリー	養護性	平均	SD	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	効果量 <i>d</i>
対象希求 および欲求	高群	4.21	2.34	-1.89	.07	-0.55
	低群	3.00	1.95			
基本的情緒 および生理	高群	18.04	4.32	-0.98	.33	-0.29
	低群	16.77	4.42			
思考・集中 および状態	高群	7.00	3.54	2.05	.05	0.59
	低群	9.23	3.84			

=2.09, *p*<.05) が示された。したがって、養護性が低い人は幼児の曖昧な表情を“思考・集中”状態であると読み取りやすいと言える。

長屋・濱田・井上・深津 (2008) が関係性評価カテゴリーを作成する際に反応分類を行った結果、①“対象希求”，“欲求”といった、子ども側の「養育者に対する関わりの要求」、②“基本的情緒”，“生理”といった、養育者側の「感受性」、③“思考・集中”，“状態”といった、養育者側の「非侵入性」の3側面・6カテゴリーが抽出された。それに従い、本研究でも3側面と養護性の高低を検討した (Table 3)。その結果，“対象希求”と“欲求”の合計反応数の差が、養護性低群と高群で有意傾向 (*t* (46) = -1.89, *p*<.10) であることが示された。

すなわち、養護性が高い人の方が低い人よりも、幼児の曖昧な表情から、情緒的相互作用を含む様々な関わりを養育者に対して求めていると読み取る傾向がある可能性が示唆された。加えて、“思考・集中”と“状態”の合計反応数が、養護性高群より低群の方が有意に多いこと (*t* (46) =2.05, *p*<.05) が示された。つまり、養護性が低い人の方が高い人よりも、幼児の曖昧な表情から、子どもがひとりで考え集中していると感じやすく、また情緒に言及せず動作や状態の把握のみに留まることが多いと言える。

また、性別とカテゴリー別反応数の関連を検討した (Table 4)。その結果、女性の方が男性よりも“生理”反応数が有意に多いこと (*t* (46) = -4.03, *p*<.01) が示された。すなわち、女性の方が男性よりも、幼児の曖昧な表情から、生理的な状態およびそれに伴う快・不快感情を読み取りやすいと考えられる。

Table 4 性別における JIFP6 カテゴリーの平均反応数

カテゴリー	性別	平均	SD	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	効果量 <i>d</i>
逸脱	男性	1.09	1.23	1.18	.24	0.34
	女性	0.67	1.20			
対象希求	男性	0.41	0.67	-1.65	.11	-0.48
	女性	0.79	0.88			
欲求	男性	3.09	2.11	0.22	.82	0.07
	女性	2.96	1.90			
基本的情緒	男性	14.45	4.96	0.30	.76	0.09
	女性	14.04	4.23			
生理	男性	2.27	1.03	-4.03	.00	-1.17
	女性	4.04	1.81			
思考・集中	男性	6.50	3.62	0.77	.44	0.22
	女性	5.79	2.55			
状態	男性	2.18	2.30	0.75	.46	0.22
	女性	1.71	1.97			

考 察

本研究の目的の一つ目は、青年期にあたる大学生・大学院生の愛着スタイル、乳幼児との接触時感情、養護性の関連を調べることであった。仮説としては、見捨てられ不安または親密性の回避が高い場合でも、乳幼児との接触時に快感情を抱いた経験が調整要因として働き、養護性が高まると考えた。

しかし本研究の結果からは、見捨てられ不安が低い場合は養護性を高める調整要因として快感情が有意に働くが、見捨てられ不安が高い場合は調整要因として有効とは言えないことが示唆された。また、親密性の回避の高低においては有意差が見られなかった。加えて、親密性の回避が低い場合、当惑感情が低いと養護性と赤ちゃん・子どもへの興味を有意に高めることが示された。仮説を支持しなかったことについて、愛着が不安定な人は自身のネガティブな感情に焦点を当てやすいため (Mikulincer et al., 1993)、快感情に注目が向かなかつた結果、調整要因として働かないことが考えられる。

一方で、親密性の回避が低い場合、不快感情が高いと積極的な養護的役割の受容を有意に高めることが示された。この結果から、乳幼児と接触した際に不快感情が生じても、親密性の回避が低い人は乳幼児との接触を避けることなく、乳幼児との関わりを試行錯誤するため、養護的役割が高まると推測される。それに対して親密性の回避が高い人は、乳幼児との接触時に不快感情が生じた場合、乳幼児との接触を避けるようになり、結果として子どもへの興味関心や将来子どもを育てようといった養護的役割を高める機会がなくなってしまうことが考えられる。

以上のことから、乳幼児との接触から養護性を高めるためには、接触時に生じた快感情だけでなく、不快感情などのネガティブな感情にも注目する必要があると言える。したがって、ネガティブな感情から子どもと接触することに回避的にならないようなサポートが求められる。例えば、子どもと接触した際に抱いた不快感や戸惑いを学生同士で共有したり指導者がそれに対してフィードバック行ったりすることで、自身の経験を一步引いて見ることができ、不快感情や当惑感情を抱いた記憶が強く残らないようにできるのではないかと考える。また、子どもと接触する中で不快感情や当惑感情が生じにくくするためには、事前に乳幼児の発達等につい

て学習を行うことが有効であると考えられる。つまり、乳幼児に関する知識を持っていれば、実際に子どもと関わった時に戸惑ったり不快に思ったりすることが少なくなると推測される。

本研究の二つ目の目的は、養護性の高低によって子どもの表情から読み取る感情・情緒はどのように変化するのか探索的に検討することであった。

本研究では、“思考・集中”の反応数が、養護性高群よりも養護性低群の方が有意に多いことが示された。加えて、“思考・集中”と“状態”の合計反応数が、養護性高群より低群の方が有意に多いことが示された。したがって、養護性が低い人の方が高い人よりも、幼児の曖昧な表情から、子どもがひとりで考え集中して作業していると感じやすく、また情緒に言及せず動作や状態の把握のみに留まることが多いと言える。つまり、養護性が低い場合、こちらから積極的に働きかけたり介入したりする可能性は低いと考えられる。また、“対象希求”と“欲求”の合計反応数が、養護性低群より高群の方が高い傾向があることも示された。すなわち、養護性が高い人の方が低い人よりも、幼児の曖昧な表情から、情緒的相互作用を含む様々な関わりを養育者に対して求めていると読み取る傾向があると言える。

JIFPの各回答を評定する際に用いた関係性評価カテゴリー表 (Table 1) は、“反応拒否”と“逸脱”を除き、回答者が写真の子どもに対して感じている心理的距離を反映している。心理的距離は最下段の“状態”が最も遠く、最上段の“対象希求”が最も近いとしている (日本IFEEL Pictures 研究会, 2019)。また本研究で扱った、子どもを対象とした養護性は「赤ちゃん・子どもへの興味」、「子どもをうまく扱える自信」、「積極的な養護的役割の受容」からなっており、養護性が高いということは子どもや子育てへの志向性が高いと言い換えることが出来る。養護性と情緒応答性に関する以上の結果から、養護性が低い場合、子どもとの心理的距離は遠い状態にあり、子どもの内的な活動に注目しにくかったり、内的活動に気付くも積極的に関わろうとすることは少なかったりする可能性が考えられる。一方で養護性が高い場合、子どもとの心理的距離は近く、子どもからこちら側に関わりを求めていると感じやすいため、子どもに対して積極的に反応したり関わったりするような行動を取りやすくと考えられる。

また、性別と感情・情緒の読み取り方の関連について検討した際、“生理”の反応数が、男性よりも女性の方が有意に多いという結果になった。“生理”は、子どもの情緒面ではなく体調面に注目する反応であり、子どもの世話をするといった養育行動を喚起すると考えられている（日本 IFEEL Pictures 研究会，2019）。加えて先行研究より、青年期の男女を比較した際に、女性は子どもを「育てる」立場のモデルを吸収しやすい傾向や、それを助長するような社会的要因が様々な体験の中に存在していると考えられている（棚澤・福本・岩立，2009）。したがって、青年期女子は男子に比べて「育てる」ことを幼少期から意識づけられているため、乳幼児の表情に対して世話行動に繋がりがやすい体調面を読み取りやすいことが考えられる。

目的（1）の検証結果より、愛着スタイルが回避的である場合、養護性を高めるためには乳幼児との接触時に不快感情をなるべく喚起させない、または不快感情を抱いた記憶を強く残さないことが重要であることが明らかになった。しかし本研究では、子どもと接触した時期や頻度、接触経験の内容については聞いていない。どのような場面で不快感情や当惑感情が生じたかといった、子どもとの接触経験についても個人ごとに聞き取り検討することで、養護性を高めるような周囲のサポートについてより具体的に検討することができるだろう。したがって今後、青年期の養護性を高める介入方法を検討する際には、より具体的な接触形態も含めて調査する必要がある。

また、本研究は養護性と子どもの表情写真を見た時の感情・情緒の読み取り方との関連についても検討した。養護性の高低によって乳幼児の表情の読み取り方が異なり、それによって関わり方の積極性も変化する可能性があることが示唆された。情緒応答性の発達の変化について明らかにされていないことは未だ多く、今後さらなる検討が求められる。

引用文献

安積陽子（2007）. 看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察—性別と乳幼児接触体験との関連から— 甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編, 1, 23-28.
蘆田智絵（2010）. Nurturance（養護性）の概念に関する理論的考察 学習開発研究, 3,

83-90.

Bowlby, J. (1969) . Attachment and loss: Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books.
（黒田実郎他訳（1976）. 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動 岩崎学術出版）
Bowlby, J. (1973) . Attachment and loss: Vol. 2. Separation, anxiety and anger. New York: Basic Books.
（黒田実郎他訳（1977）. 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版）
Biringen, Z., & Robinson, J. L. (1991) . Emotional availability: A reconceptualization for research. American Journal of Orthopsychiatry, 61, 258-271.
Emde, R. N. (2000) . Next steps in emotional availability research. Attachment & Human Development, 2, 242-248.
Emde, R. N., Osofsky, J. D., & Butterfield, P. M. (1993) . The IFEEL Pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions. International University Press.
Emde, R.N. & Source, J. (1983) . The rewards of infancy : Emotional availability and maternal referencing. In D. J. Call et al. (Eds), Frontiers of Infant Psychiatry Basic Books.
（小此木啓吾（監訳）（1988）. 乳幼児精神医学 岩崎学術出版社）
Fogel, A., Melson, G. F., & Mistry, J. (1986). Conceptualizing the Determinants of Nurturance: A Reassessment of Sex Differences. In A. Fogel, G. F. Melson (Eds), Origins of nurturance : Developmental, biological and cultural perspectives on caregiving. (pp.53-68). Hillsdale. NJ: Erlbaum.
平野直巳・森さち子・井上果子・濱田庸子・滝口俊子・深津千賀子・小此木啓吾（1997）. 日本版 IFEEL Pictures: 母親への施行結果からの特徴の検討 心理臨床学研究, 15, 144-151.
井上カーレン果子・濱田庸子・深津千賀子・滝口俊子・小此木啓吾（1990）. 乳児の写真から情緒を認知する能力の測定—Japanese I Feel Picture Test— 家族療法研究, 7, 114-124.
岩治まどか（2009）. 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要, 49 (1), 133-142.

- 川瀬隆千 (2010). 大学生の親準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要, **17** (1), 29-40.
- 小嶋秀夫 (1989). 乳幼児の社会的世界 有斐閣
- 小嶋秀夫 (1991). 親となる過程の理解 我妻堯・前原澄子編 母性の心理・社会学 医学書院 (pp.79-111)
- 厚生労働省 (2019). 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について (第15次報告) 及び児童相談所での児童虐待相談対応件数
- 棚澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, **57**, 168-179.
- 松本奈巳・重橋のぞみ (2017). 青年期女子における親性準備性と内的作業モデルの関連 福岡女学院大学大学院紀要: 臨床心理学, **14**, 47-54.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller A. (1993). Attachment styles, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 817-826.
- 無藤隆・久保ゆかり・遠藤利彦 (1995). 現代心理学入門2—発達心理学— 岩波書店
- 長屋佐和子 (2009). 日本版 IFEEL Pictures: 関係性評価カテゴリーによる母親標準データの分析 中京大学心理学部紀要, **8** (2), 25-31.
- 長屋佐和子・濱田庸子・井上果子・深津千賀子 (2008). 日本版 IFEEL Pictures の研究—関係性評価カテゴリー作成の試み— 精神分析研究, **52** (1), 18-29.
- 中根成寿 (2007). 障害は虐待のリスクか?—児童虐待の発達障害の関係について— 福祉社会研究, **8**, 39-49.
- 中西由里・粟津幹子 (1996). 「養護性 (nurturance)」に関する一研究—幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較— 椋山女学院大学研究論集 社会科学篇, **27**, 9-18.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 日本 IFEEL Pictures 研究会 (2019). 日本版 IFEEL Pictures 実施マニュアル 第三版
- 扇原貴志・首藤敏元 (2016). 大学生における過去の乳幼児との接触経験とその際に抱いた感情 埼玉大学紀要, 教育学部, **65**(1), 1-14.
- 扇原貴志・上村佳世子 (2018). 大学生における子どもへの関心の諸要因—乳幼児との接触経験・内的作業モデル・他者意識の影響— 応用心理学研究, **43**(3), 256-266.
- 扇原貴志 (2017). 乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響 学校教育学研究論集, **36**, 1-15.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における 利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- 礪波朋子 (2011). 女子大生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連 京都光華女子大学研究紀要, **49**, 13-25.